



感想のメールをお待ちしています! hayan@hayan.jp

活動実態調査レポート好評発行中!

は

本産業広告協会

の中から数千社
ト方式で調査

No.	回答	現在		1年前		過去1年	
		賃金	賞与	賃金	賞与	賃金	賞与
1	月給未満	75	59.7%	77	56.3%	78	54.8%
2	月給5万円以下	75	59.7%	78	56.3%	78	54.8%
3	月給5万円以上	28	21.4%	22	16.3%	23	17.5%
4	月給未満	24	17.9%	24	17.9%	25	18.7%
5	月給5万円以上	21	15.0%	15	11.3%	15	12.5%
6	年俸未満	45	35.0%	55	45.0%	50	41.7%
7	年俸5万円以下	45	35.0%	55	45.0%	55	45.0%
8	年俸5万円以上	14	10.7%	15	11.3%	15	12.5%
9	年俸未満	42	32.3%	41	31.3%	41	31.3%
10	年俸5万円以上	17	12.5%	17	12.5%	18	13.3%
11	年俸未満	6	4.6%	5	3.8%	5	3.8%
12	年俸5万円以上	13	9.6%	13	9.6%	13	9.6%
合計		350	26.6%	350	26.6%	350	26.6%

サンプルデータ

お申込み・詳細はWebサイトよりどうぞ

www.iaaj.or.jp

排ガス浄化技術

ハイブリッド自動車(HV)や電気自動車(EV)の存在感が増している。しかし主流は現在もガソリンエンジン車だ。その排ガス浄化の重要性は、浄化技術が進んだ現在も環境問題や排ガス規制強化の流れを背景に増すばかり。さらに排ガス浄化は資源問題にもつながっている。浄化に使われる白金など貴金属をいかに減らすかが排ガス処理の大変な課題だ。(熊本支局長・関広樹)

白金など貴金属の触媒低減

使用増える3元素

課題解決に取り組んでいるのが、熊本大学大学院自然科学研究科複合新領域科学専攻の町田正人教授。ガソリンエンジンの排ガス浄化触媒には

使用は増え、必然的に価格は上がることになる。ウムの3元素を使う。車種によって使い方や使用量などは異なるが、使う物質は変わらぬ。世界的に自動車の生産台数が増えることで3元素の質があることでも分かっている。その大きな理由は使用条件の厳しさだ。排ガス浄化触媒は自動車に組み込まれる。原則取り扱えることがなく何十年も使われ続ける。浄化性能と耐久性を長期間維持する物質として3元素が適している。しかし普及には至ってない。

物質として3元素が適してい

件の厳しい。熊本大

媒は自動車に組み込まれる。原則取り扱えることがなく何十年も使われ続ける。浄化性能と耐久性を長期間維持する物質として3元素が適してい

ない。30年以上評価は変わっていない。

これまでに3元素の代替物を探して研究も行われており、それは貴金属と排ガスが触れる面積が大きければ大きいほど浄化能力が高くなるという理由のためだ。そのナノ粒子を金属の酸化物に固定して触媒としている。

ロジウム一ヶタ減も触媒の浄化能力を下げる主な原因是熱だ。排ガスは高速道路を走行するごとに100度C程度まで上昇することもある。温度が上がるごとに金属の酸化物に固定した貴金属のナノ粒子は移動するようになる。「結合はあるけれども供給されず、熱エネルギーに負けてしまって動く」と町田教授(ともだじゅうじん)は現象が起きる。動いたしたナノ粒子は、例

えばバスの葉の水滴が集まつて大きくなるように大きな粒子になる。すると単位重量当たりの表面積は小さくなり、浄化能力は低くなる。現在の触媒で使われている貴金属の量は高温による能力低下を見越した量だ。

そこで町田教授はナノ粒子が動かないように固定することである。そこで高温による能力低下を防ごうとしている。現在使われている貴金属3元素を前提としてナノ粒子を固定する方法を土台にして研究対象としている。現在、貴金属のナノ粒子を土台に固定する方法を確立する。これを「Hv」という。町田教授は土台の研究とともにナノ粒子の合成法の開発においても取り組んでいる。現在、白金、パラジウム、ロジウムの量を変えて、耐久性確認が課題だ。



町田教授は土台の研究とともにナノ粒子の合成法の開発においても取り組んでいる。現在、白金、パラジウム、ロジウムの量を変えて、耐久性確認が課題だ。町田教授は土台の研究とともにナノ粒子の合成法の開発においても取り組んでいる。現在、白金、パラジウム、ロジウムの量を変えて、耐久性確認が課題だ。

町田教授は白金、パラジウム、ロジウムのいずれについてもアラスマの利用が可能であることを確認している。プラズマ利用が実用すれば工程間に生じる可能性のある材料の削減や作業時間の短縮、作業環境の改善などの長所があると見ている。今後は、これが土台の研究などでアラスマの稼働が停止した量だ。

白金、パラジウム、ロジウムの量を変えて、耐久性確認が課題だ。

町田教授は土台の研究

法。例えと貴金属の塊に電弧を落としてナノサイズのプラズマ粒子を発生させて土台に固定する方法だ。従来の多段階工程で作ったナノ粒子は大きさが不均一だが、プラズマを

使うと粒子が均一になり、平均的におなる。そのため、この結合による触媒は高い浄化能力をも從来の触媒に比べて高いといふ。

環境・資源問題解決へ